天空和音！　キグルミオン！

境康隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空和音！　キグルミオン！

【Ｎコード】

Ｎ６１４５Ｙ

【作者名】

境康隆

【あらすじ】

仲埜瞳（なかのひとみ）は、着ぐるみ大好き女子高生。愛称はヒトミ。着ぐるみに関しては、たぐいまれなセンスを発揮する元気少女。人類滅亡の危機と言われている宇宙怪獣襲撃の時代を明るく真っ直ぐ生きていた。そんなヒトミはひょんなことから、宇宙怪獣に唯一立ち向かうことができるある兵器の操縦者となってしまう。フェルミオン。グルーオン。ダークマター。ダークエネルギー。瞳はよく分からない単語を聞かされながら、対宇宙怪獣用兵器――キグルミオンで立ち向かった。（『鎧袖一触！　キグルミオン！』の書き直しとなります）

プロローグ

天球は和音す――
ヨハネス・ケプラー（１５７１～１６３０）。数学者。天文学者。物理学者。
惑星――天球の軌道直径を導き出したケプラー。彼は惑星は和音を奏でていると信じた。

プロローグ

「天球は和音す。いい言葉だと思うわない？　惑星が音をつむぎだすのよ」

白衣の女性が夜空を見上げた。ややつり目がちの目をきりりと細め、不自然なまでに明るい満点の星空をその瞳に写し取る。
「元々は古代の哲学者ピタゴラスが、太陽系の星々の軌道を見て言い出したの。そして後に天動説を完全に否定したケプラーが、この考え方を引き継いでね。ケプラーは神秘主義に傾倒していた部分があってね。哲学者にして、数学者にして、魔術師とも言われたピタゴラスの考えがとても気に入ったんじゃないかしら。それで惑星が和音を奏でるって考えたみたい」
白衣の女性はそのつり目がちな目をつむり、今度は耳を澄ませてみせる。まるで今まさにこの星空で奏でられている和音に耳を傾けたかのようだ。
「惑星が歌ってくれるのよ。私達が依って立つ世界である地球も含めてね。じゃあ宇宙は？　この世界そのものである天空は、どんな和音を奏でてくれのかしら？　私は天球和音という言葉を思い出す度にそう思ってしまうわ。天空は和音しないのかしらってね。和音

で私達に語りかけてこないのかしらってね」
彼女はそのつり目をゆっくりと開け、静かに背後に振り返る。そこはビルの上だった。
都会のビルの上。夜半を過ぎた夜空とはとても思えない、奇妙なまでに明るい星空がその上空には広がっていた。
白衣の女性の後ろにいたのは、何処まで丸いフォルムを持つ人のような何かだった。
「ましてや、何かを私達に伝えるつもりじゃないのかしら――ってね」
白衣の女性は自問するかのように微笑んだ。
「宇宙は謎よ。謎だらけよ。私達物理学者はこの謎をダークだと呼んでいるわ。ダークマターに、ダークエネルギー。ダークフローとかね。それ以外にも、力の粒子であるグルーオンは未だ取り出せず、重力子も見つかっていない。ましてや重力波なんて本当にあるのかしら。超対称粒子は予想の域を出ないし、全てを説明してくれる万物の理論は私達の手にはまだまだ遠いわ。次元は十一次元かもしれないし、重力はその次元を漏れ出ているのかもしれない。不思議なことばかりでしょ？　宇宙は謎だらけなのよ」
「……」
丸いフォルムは応えない。
「宇宙は何も教えてくれないわ。でも意地悪もしないのよ。あるがままにそこにあるだけ。ダークだと思ってしまうのは、私達の知識が足りないだけなのよ。宇宙はちゃんとそこにある。だから私達自身で解明するしかないの。そうね、今まさにこの地球に起こっているこの不思議から解き明かすべきかしら」
白衣の女性は天を見上げた。
そこには茨状の謎の発光体が、天空の端から端まで覆うように浮かび上がっていた。それはそれ自身が優しい曲線を描きながら、その端々にやはり優美な刺のような曲線を生やしている。全てが眩いばかりの光線だ。

ある者はそれを天に召しました救世主の茨の冠だと言う。ある者は聖母が祈りの為に瞑っている瞳だと言う。またある者は今正に、人類に天罰を食らわさんとしなりを上げている刺のムチだとも言う。

いずれにせよそれは誰にも何であるか理解できていない。ある日突然現れ、夜を昼のごとく明るく染めながらもう何年も天に輝いていた。

そう今の星空は不自然な程明るい。それは地上の人工の光が満点の夜空を邪魔する以上に、その謎の発光体が天空で輝いているからだ。

「……」

丸いフォルムを持つ人のような何かが頷いた。

「いきましょう。私達ならそれが――」

白衣の女性は相手に応じて頷いた。

「そうよ。私達のキグルミオンなら、この世界を救うことができるわ」

そして力強く歩き出した。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　1

「キャー！」
悲鳴が上がった。
「誰か！　子供が！」
それは悲痛な叫びだった。
夕闇迫る街中に、突如現れた巨大怪獣。
街を瓦礫の山と化し、人々を阿鼻叫喚の地獄に陥れた。
それは例えば母親の目の前で、年端もいかない子供を踏みつぶす――

そういう地獄だ。
今まさに巨大な脚が、五、六歳と思しき少女に踏みつけられようとしていた。
悲鳴を上げたのはその少女の母親だ。母親は叫ぶことしかできない。彼女もまたこの巨大な脚が作り出した瓦礫に、その足首を挟まれていたからだ。
は虫類を思わせる四肢とその体躯。それでいて二足歩行。
強靭なアゴに並ぶ、凶暴凶悪な牙。
爪は破壊を呼び寄せるかのように、虚空を突いて鋭く伸びている。
尻尾は巨大なムチだ。破壊の為に生えているかのような、骨と筋肉の固まりだ。
実際その禍々しい尻尾は、ふるう度にビル群を真ん中から二つに折ってしまっていた。
まさに怪獣としか呼びようのない異形の生命体。
それが街を、そして人々を壊していく。
手近なビルよりも大きいその異形の生物は、家屋程もある脚を持ち上げる。大人も子供も、この巨体からすれば同じに見えただろう。区別する意味すらないからだ。
目的も衝動もないのかもしれない。本能のままに、破壊できるも

のを破壊している。それだけのことなのかもしれない。
だから躊躇も何もない。
その怪獣が少女に脚を踏み下ろした、まさにその時――
「――ッ！」
一人の巨人が現れ、怪獣を蹴り飛ばした。
少女の頭上で、怪獣の脚が空を切る。
巨大な風がおこり、少女の全身をその突風が襲った。
怪獣が大地を転がり、地響きが人々の体を直接打ちつけたかのように響き渡る。
突風を作り出した巨人は、怪獣にやや遅れて大地に降り立つ。
巨人は能面のようで、それでいて菩薩像のような微笑みを浮かべた仮面をかぶっていた。全身を包んでいるのは、その身にぴたりと張りつく素材不明のスーツだ。
怪獣はすぐさま体勢を立て直した。本能だけを感じさせる赤く輝く目を、突如現れた巨人に向ける。
巨人は身構える。その左足の後ろに、少女を匿うように身構える。右足を後ろに引き、両手を手刀の形に構えて怪獣と相対する。
怪獣が大地を蹴った。その巨体で軽やかに前に出ると、巨人の体に体当たりする。やはり地響きが湧き上がり、大地が揺れた。
巨体が二つぶつかった衝撃は、空気をも揺さぶる。まるで骨と内臓で直接聞いたかのような衝撃音が、周囲を逃げ惑う人々に届けられた。
巨人はその場を動かない。左足に匿ったその少女の為に、その場にとどまろうとする。
だがそれは無理があったようだ。
一歩も動かすまいと踏ん張ったその左足は、体当たりをきめた怪獣の体を片足で支えてしまう。
巨人の脚はあり得ない方向に曲がった。
怪獣の全体重を乗せられて、左膝から下が関節とは逆の向きに曲がる。

――ゴッ！
そう聞こえた鈍い音は、巨人の膝が砕けた音かもしれない。
巨人は右足を踏ん張り、更に左手をビルの屋上に突いて、己の体重と怪獣のそれに耐えようとする。
しかしビルは脆かった。巨人の左手は屋上から二、三階部分を打ち抜いて止まる。
バランスがとれない。怪獣はそのまま体重を預けてくる。
のしかかった際に背中に回された怪獣の腕は、容赦なくスーツに爪を食い込ませる。
左膝から伝わってくるのは、脚が千切れたかと思う程の衝撃だ。
ビルがまた崩れた。左手は更に屋内に埋もれていく。
怪獣の爪は増々背中に食い込んでくる。
そして怪獣の身は更にその重さを増し、無慈悲にも左足にのしかかる。
「――ッ！」
左足に走るのはやはり激痛だ。
それでも巨人は左足を動かさない。
今やふくらはぎに覆われる形となった少女が、まだその下にいるからだ。巨人は痛みに耐えて少女に首だけ振り返る。
陰に隠れた少女は、その巨人を見上げていた。
一歩も退かず。
まるで動ぜず。
微塵も怯えず――
ただひたすらに、尊敬の眼差しで巨人を少女は見上げていた。ショーでも見るかのように。スクリーンにでも魅入るかのように。勧善懲悪の世界に、心奪われているかのように。
巨人はその少女と目が合う。
少女は花咲くように、一際大きく微笑んだ。
その瞬間――
「――ッ！」

巨人は怪獣と逆境を同時にはね除けた。
大地を揺らし、ビルを押し倒してその巨体が転がっていく。
巨人は立ち上がり、今一度少女に振り向いた。そして大きく頷く。
少女が笑顔のまま頷き返した。
怪獣が夕日を背に立ち上がる。
巨人はもう一度身構える。まるで左膝が砕けたことなど、なかったかのように身構える。自分の背中にいることが、どれほど安全かを分からせるかのように身構える。
そう――
己を信じて疑わない――そんな瞳を向ける少女の為に。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　2

それから十年後――

「止めなさい！」

己を信じて疑わない――そんな凛とした、それでいてくぐもった声が響き渡った。

そう、それはくぐもった声だった。何か空洞で反響するかのような少女の声が、それでいて力強く路地に響き渡った。

それは昇り始めたばかりの今日の陽射しにも負けない程、力強い意思の籠った強烈な声だった。

ここは繁華街。その路地裏。

華やかな表通りとは裏腹な、人気がなく陽も差し込まない人生の裏街道――そんな場所だ。

生ゴミの匂いが鼻をつき、湯気の熱気が皮膚にまとわりついた。路地を濡らす油が靴底を滑らし、煩雑に並べられたゴミ箱や自転車が衣服に引っかかる。雑然としたビルの谷間だ。

何となく脚を踏み入れるのを躊躇われる、社会の裏舞台のような場所だ。

だが――

「あぁん！」

「止めなさいって、言ってるのよ！」

だがくぐもった声の主は、この路地裏の陰鬱な雰囲気に臆さないようだ。変わらずよく響く声で、相手を制止しようとしていた。

声の主はやはり少女のようだ。しかもまだ若い。声から察するに、まだ高校生ぐらいだろう。

「何じゃわりゃ？　何のようじゃ？　儂がどういうもんか、分かっとんのか？」

そう、これもんで、それもんで、あれもんな感じの――その筋のお兄さんに、立ち向かっていいような歳には思えない。
裏地に龍の刺繍をした背広をはためかせ、その男は眉間にシワを寄せて振り返る。広い肩を怒らせ、脚を方々に投げ出すようにその少女らしき人物に近づく。
剃り上げた頭も、悪趣味な光沢を放つ足下の革靴も、そして胸に光る、時折ニュースで見かけるマークのバッチも――その全てが僅かな隙間から差し込んだ光に、威嚇するかのように反射していた。
その男の向こうには、怯えたように縮こまる男性が壁を背に震えていた。こちらは見るからに一般の会社員のようだ。
「あなたが何者かは知りません。ですがあなた方がぶつかったのは、お互い様なのは私は見てました」
「あん！　姉ちゃんよ！　あまりふざけた格好で、ふざけたことぬかすと――」
「姉ちゃんではありません！」
少女は相手に『ふざけた』と言われた格好で、ドンッと一つ前に出る。
大きな影が背後の繁華街の光を切り取っていた。確かにその影は少女のものにしては大き過ぎた。こんもりと路地裏の入り口を陣取っている。だが声は間違いなく少女のものだ。
「姉ちゃんじゃなきゃ、何だってんだ！　あぁん！」
男の怒りは今にも頂点に達しようとしていた。
沸々と湧き上がる感情のままに、剃った頭の皮膚に血管が浮き出る。その血管が内で破裂でもしているかのように、男の顔は真っ赤だった。
歯は暴力の衝動を押さえるかのように噛み締められ、指先は今にも殴りかからんと内に折り込まれて震えていた。
それほどの怒りを買う程、少女の格好は人を――食っていた。
「私は――」
そう、なぜならその少女は――

「私はウサギのチャッピーです！」

ウサギの着ぐるみを着ていたからだ。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　3

「こんなひどい時代に、暢気なものね。一般市民の皆様は」
少々つり目の目尻を怪訝に細め、白衣の女性が眉をひそめた。そのまま目をつむり、手に持っていたカップに口をつける。
彼女は窓際に腰掛けていた。窓から他のビルの屋上部分が見て取れる。その景色から、彼女のいる部屋が中高層の建物の一室であることがうかがい知れた。
「いい匂いに、いい色。フレーバーやカラーも、やっぱり物理的な現象よね」
白衣の女性は一口カップの中身を口に含ませるや、ほうとため息を吐き出しながら呟いた。
カップから立ち上がる湯気が、狭い室内に立ち上がっては直ぐに消えていく。
普通の事務所のように見える。事務机があり、ロッカーが壁際に並べられている。狭いと言っても五人は配置できそうなそのスペースに、今は二人だけがその部屋にいた。
己の手元から立ち上がる湯気をしばらく目で追い、白衣の女性は目を窓の向こう――そのガラス越しの路上に目をやった。
眼下では何やら人ごみができており、一目で騒ぎが起こっているのが見て取れた。
何しろ繁華街の路地裏を覗き込むように、それでいながらなるべく近づくまいとしているように、同心円状に人の山ができていたからだ。
「ふふん……家から持ってきた……博士の為に……」
情報端末から片時も手を離さず、一人の少女が小声で応えた。女子高生らしき制服を着ており、何処か眠たげな視線をモニターに向けていた。
少女はイスに寄りかかって座りながら、片手にもった情報端末に

もう片方の指を一時の迷いもなく走らせていた。
「ありがとうね。さて、一般市民様の喧噪でも見ながら――ん？」
「何……」
端末を操作する女子高生は、やはり眠たげに、その上興味もなさそうに間の手だけを入れる。その間一瞬たりとも指の動きは止まらなかった。
「凄いわ。ウサギがこれもんな人に、立ちはだかっているわ」
「ウサギ――ッ？　何処！」
女子高生がガタッとイスから立ち上がる。情報端末を片手に、その少女は慌てて窓際まで走っていく。眠たげな視線はそのままに、ウサギを一目見んとか、体だけは飛ぶように窓際に向かった。
その際垣間見えた情報端末の中には、ぬいぐるみを模したと思しき動物のキャラクター達がいた。正確には動物を擬人化したぬいぐるみのキャラクター達だ。
そしてその端末が揺れるに合わせて、まるでその中に本当にいるかのように、ぬいぐるみ達は方々に転がり慌てふためいていた。わざとらしく、何処か楽しげだ。
「あれよ」
白衣の女性が顎で眼下の光景を指し示す。その視線の先――ビルの谷間では、ウサギの着ぐるみが右に左にと大立ち回りを演じていた。相手の繰り出す拳を、その巨大な頭部にもかかわらず紙一重でかわしているのだ。
「どれ？　ぬぬ？　ウサギの着ぐるみ……小汚いけど、かわいい……」
「あはは。あんなかわいいナリで、それもんの人に立ち向かっちゃダメよね」
「むむ……それは、私達も同じ……」
「そうね。ま、一度も実績がないけど」
白衣の女性はもう興味をなくしたのか、それともその話題に触れたくないのか、すっと眼下から目を離し、カップに再度を唇をもっ

ていった。
「博士……あのウサギ、スカウトしよ……あのウサギならやってくれるかも……」
「何言ってんの、美佳(みか)ちゃん。？アレ？は私達だけでどうにかする。そう決めたでしょ？　それに、アレは普通の人間で無理。だから美佳ちゃん達に頑張ってもらってるんでしょ？」
「ぐぐ……」
美佳と呼ばれた眠たげな少女は、窓の下のウサギの動きに目を釘付けにされたまま唸った。
「期待してるわよ」
白衣の女性が微笑んで美佳の方に目を向ける。窓に張りついたままの美佳とは目が合わず、彼女はそのまま美佳が持っていた情報端末のモニターに目を転じた。
モニターの中から数体のぬいぐるみのキャラクターが、まるで博士の視線と声に応えたかのように手を振り返した。
その時――
「――ッ！」
耳をつんざく不快な音とともに、室内が真っ赤に照らされた。
美佳がビクッと驚き、反射的に情報端末を抱き締めた。
「警報！　まさか？　ついに来たの！」
白衣の女性はとっさに窓から、空を見上げた。いや、彼女は空よりもっと上を見ていたのかもしれない。
何故なら――
「宇宙怪獣……」
空よりももっと遥か彼方からやってくる、人類滅亡の脅威の名を呟いたからだ。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　4

ウサギの着ぐるみが、恐喝現場に割って入っていた。
円らなプラッチックの瞳。常に笑っている口元。ウサギであることを主張する、アンバランスで大きな耳。そして白い――残念ながら少々黄ばんで薄汚れた生地の肌。
その肌の上に、子供受けする原色が配された衣装を着ている。やはりこちらの衣装も、所々色あせている。
そう何と言うか全体に安っぽい。いかにも低予算で作られ、使い古された着ぐるみだ。
そんな少々残念でファンシーなウサギの着ぐるみが、肩甲骨も逞しいその筋の男の前に立ちはだかっていた。
その異様な光景に、後ろの街路をいく人が遠巻きに通り過ぎていく。
「チャ、チャッピー……だぁ……」
男は苛立たしげに声を絞り出す。
今月の上納金がまとまらず、金策に文字通り走り回っていた。街ゆく会社員風の男性に少々肩がぶつかり、頭の中が一瞬で真っ白になった。一気に血が上っただけだった。
しかし元より舐められたままでは終われない職業だ。ましてやストレスは最高潮に達している。何より少しでも金になる。
男は怯え謝る会社員を、有無を言わせず路地裏に連れていった。
そこに突如現れたのだ。少女が、ウサギが、着ぐるみが。何だか頭の悪そうな奴が。
苛立ちもここに極まれりだ。
「舐めてんのか！」
男は怒りのままに拳を振り上げた。相手は素人。その上少女。それ以前に着ぐるみ。一発ヤキを入れれば、泣いて逃げ出すと思っていた。

だが――
「――ッ！　何？」
だがウサギの着ぐるみ――チャッピーは、さっと左足を後ろに退くやその身を半身に構えた。
そして男の拳は空を切る。いや、ただ空を切るだけではなかった。伸ばし切ったその右腕は、完全に相手に懐を曝す結果となっていた。
その懐にチャッピーが崩れぬ笑顔で潜り込む。
「何だ！　おらぁ！」
この男でなくとも、そう叫びたいだろう。
楽しげで巨大なウサギの顔が、あくまで真面目にキレている己の顔に押しつけられたからだ。
だが男は気がつけば右手の裾は掴まれ、左の襟も捉えられていた。腰は完全に相手の腰に浮かされ、全ての重心が右に傾けられている。脚の裏からは、瞬く間に地面の感触が消えていた。
次の瞬間――
男は宙を舞っていた。そう、一本背負いで投げられていた。むしろ心地よいまでに全身で空気を切り裂きながら、男の体はチャッピーの背中で反転する。丸で風車だ。
「えっ？」
気がついたのは背中を地面に着いた後だった。そして地面で背中を強く打たないように、直前で体が引き上げられたのもその瞬間に悟る。
しかし男はその現実が受け入れられない。ただただ呆然と、しばしビルの屋上に区切られた青い空を見上げる。
投げられたのだ。この狭い路地裏で、ものの見事に。そして手加減されたのだ。素人に。少女に。着ぐるみに。ウサギのチャッピーに――
「この！」
男はそこまで思い至って、またもや頭に血を上らせる。男は頭に昇る血の勢いのままに立ち上がり、闇雲に拳を振り回した。

だがチャッピーはその大きな頭にもかかわらず、軽々と男の拳を上半身の動きだけでかわした。
ストレートは少し右に左に体を傾けるだけで、男の腕はあさっての方向に外れていった。フックは前に屈んでかわし、男の拳は空しく宙だけを刈る。アッパーは後ろにそって逸らし、男の手は虚空に向かって突き上げられた。
足下の動きも軽やかだ。
男は目測をつける度に前に出る。だがチャッピーはすぐに、ステップを踏んで相手との距離をとる。横と後ろに軽やかに動き、必要充分な分だけ移動する。
やはりこの狭い路地裏で、チャッピーは男の攻撃をいなし、そしてかわしていく。
それはまるでウサギそのものの――
見ている者にそう思わせる素早さだ。
「ぐぎぎ……」
男の拳は何度放っても、相手に当たらない。男は歯ぎしりか唸りか分からない声を、思わず漏らしてしまう。そして業を煮やしたのか、
「てめぇ！」
一気にチャッピーの懐に飛び込んできた。
しかしその男を迎えたのは、足先に走る衝撃と、空転する視界だ。男の体はあたかも鉄棒に体を預けたかのように、空中で横に一回転する。
男が地面に落ちた瞬間に見えたのは、軽く上げられたチャッピーの右足だ。
また倒されたのだ。今度は右足一本で。やはりふざけたウサギの着ぐるみに――
男の視界は一気に、理性が燃え尽きたかのように真っ白になる。全ての視界が狭まったかのように、周りが白くなり見えなくなる。
もはや怒りで目の前のウサギの着ぐるみしか見えない。ここがど

こであったのか、相手が何であるか、今がどういう状況か、男には全てが見えなくなる。
「てめえーッ！」
怒りのままに男は立ち上がると、素早く懐に手を入れる。
「――ッ！」
そして男は震える手でその手を突き出すと、
「キャーッ！」
周囲の悲鳴に酔いながら、何か鈍く光るものをウサギの着ぐるみに突きつけた。
ナイフだ。
「なっ？」
流石に驚いたのか、ウサギのチャッピーが硬く身構え直した。
「姉ちゃんよ！　覚悟――」
男が恫喝の為に顔を歪めたその時――
ごおおおぉぉぉぉ……
地鳴りのような、腹の底を直に震わされたような、まるで巨大な獣――そう、怪獣でも咆哮したかのような声が響き渡った。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　5

「自衛隊のスクランブルを確認……こちらに向かってきます……」
「流石ね。時間ないものね。でも、通常兵器なんて、何処の国のものも……」
美佳が指を走らせる情報端末を、後ろから覗き込みながら白衣の女性が真剣なまなざしで呟いた。
「臨時ニュース……市民の避難を呼びかけています……」
「そう。それしか選択肢ないもの……通常兵器による足止め。そして……でも――」
白衣の女性は一度強く目をつむった。
そのままゆっくりと目を上げる。意思と決意のこもった瞳が露になる。
「桐山久遠（きりやまくおん）の権限において宣言します！　現状を特務級非常事態と認定！　よって我が特殊行政法人『宇宙怪獣対策機構』は、その設立の任を果たす為、迎撃行動に入ります！」
キリリと凛々しくつり目の目尻を更に鋭く吊り上げ、久遠と名乗った白衣の女性は情報端末に向かって叫び上げた。
「博士……権限と言っても、代理……いいの？」
美佳が情報端末を操作しながら久遠を見上げる。
「構わないわ、美佳ちゃん。あの人を待つ余裕はない。あの人も同じ結論を出すはずよ」
「ぬぬ……分かった……」
美佳の眠たげな視線が、それでもその奥に力のこもった光を宿す。
「ヌイグルミオン！　出動！　宇宙怪獣を迎え撃つわ！」
「了解……」
久遠が号令を発し、美佳がそれに応えて情報端末に指を滑らせた。
情報端末の中では、何故かコアラのぬいぐるみが、画面の外に向かってビシッと敬礼をしてみせた。

「何だ？　どうなっとんじゃ！」
ナイフを片手に暴漢が取り乱したように辺りを見回した。
「警報？　訓練じゃなくって！　まさか？」
ウサギの着ぐるみが驚いた声で、それでいてくぐもった声色で叫んだ。
「ちっ！　どけっ！　わりゃ！」
一目散に逃げ出した周囲の野次馬を追いかけるようにして、暴漢もナイフを懐に戻すと駆け出した。
ウサギの着ぐるみにぶつかるようにして路地裏から逃げ出して行く。
「痛っ！」
チャッピーと名乗り暴漢の攻撃を軽くかわしていたウサギも、この時ばかりは押し退けられて尻餅を着いてしまう。その勢いで路地裏から飛び出し、逃げ惑う人々の足下に投げ出されてしまった。
「君！　大丈夫か？　早く逃げないと！」
丁度通りかかった男性が、そんなウサギに立ち止まって声をかける。
「ええ。大丈夫です。訓練――じゃないですよね？　これって……」
「ああ、宇宙怪獣用の本物の警報だ。ここも、他と同じになるのか……宇宙怪獣に蹂躙し尽くされて、最後は核兵器を撃ち込まざるをえなくなる……町と環境の全てを犠牲にして、倒すのがやっと……」
「そんな……」
「とにかく、今は避難だ。君も早く着替えて、逃げなさい」
男性はそれだけ言うと走り去って行く。
「……」
一人取り残されたウサギの着ぐるみは、空高く見上げた。
昼尚明るい茨状発光体。それが晴天の空でも確認できる。
神の茨の冠。女神の閉じた瞳の睫毛。天罰のムチ――神や天なぞ

らえて、それは人々に畏怖の念を与えていた。
それは十年前に現れた。
史上初めて宇宙怪獣が現れたその日に同時に現れた。
関係を疑う者はいない。だが説明できる者もいない。宇宙怪獣の理不尽さも、謎の発光体の不思議さも、誰にも理解できなかった。
ただ宇宙怪獣の象徴としてことあるごとに見上げられていた。
「『宇宙怪獣に蹂躙』。『最後は核兵器』。『全てを犠牲にして』。そんなことない……」
ウサギの着ぐるみはそのふっくらとした拳を固く握った。
「十年前。確かにこの町は救われたもの。あの人のお陰で――」
その声はやはり少女の声で、くぐもっているがとても力強かった。
そしてそんな少女の目の前で――
「――ッ！　ビルが！」
中高層ビルの壁面が、音を立てて綺麗に左右に割れた。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　6

「擬装ビル展開！」
「擬装ビル展開……」
久遠が号令を発し、美佳が鷹揚の少ない声で応えた。
二人がいるビルの窓の向こう――正面の中高層ビルの壁面が、音を立てて左右に割れた。
それは破壊されて割れている訳ではない。ビルの壁面が機械的に左右に開いていく。まるでビルの壁面がスライド式の収納扉のようだ。
そのビルの壁面一枚分の質量が開く振動は、二人がいるビルをも震わせた。
「擬装ビル展開完了……問題ありません……」
「オッケー！」
ビルの壁面が開き切ると、そこには造船所のドックを縦にしたような空間が現れる。
その暗い中には丸いシルエットをした何かが？いた？。
「ヌイグルミオンの様子は？」
「キャラスーツ適合……サイズ補正装置、何とかなっています……中の人がヌイグルミオンでも、いけます……」
美佳が忙しく情報端末に指を走らせながら答える。
「よし、ありがとう。最初にして最大の関門――『観測問題』……何とかなってるわよね……」
久遠が真剣な表情で呟く。
「さて『ウィグナーの友人』は、何処まで私達の味方をしてくるかしら？」
久遠は少々早口に捲し立てる。口はせわしなく動きながらも、体はその場から全く動かない。緊張しているようだ。
「ウサギ……」

美佳が呟いた。それはいつもの小さな声だが、ぽろりと思わず漏れたような殊更小さな声だった。
「何？　美佳ちゃん。あの子はコアラでしょ？　コアラのユカリスキー。今は猫のキャラスーツに入ってるけど」
「いえ……さっきのウサギの着ぐるみが、擬装ビルの下に……」
美佳が端末から振り返った。
「逃げ遅れてるの？　もう！　『宇宙怪獣警報が発令されたら、一目散に避難』でしょ！」
久遠が美佳の情報端末を覗き込み、更に身を翻して壁際に駆け寄るや勢い良く窓を開けた。
「ちょっと！　そこの君！　早く逃げなさい！　今、そのビルから、対宇宙怪獣用決戦兵器――」
久遠が窓の外に身を乗り出した。
「博士……『ウィグナーの友人』状態長く保ちません……出します！」
美佳が殊更勢いよく指を端末の上で走らせた。
その時――
「キグルミオンが発進するのよ！」
久遠の絶叫とともに、ビル中からその大きさ程の巨大着ぐるみが現れた。
「えっ？　何！　着ぐるみ？　猫の着ぐるみ！」
ウサギの着ぐるみが、変わらない笑顔の面を驚きに上げる。
そう、ウサギの着ぐるみの前には、己の二本足で立つ巨大な猫の着ぐるみがいた。
猫の着ぐるみはビルの中にすっぽりと収まっていた。
ウサギは呆然とビルの中の巨大着ぐるみを見上げ続ける。

「――キグルミオンが発進するのよ！」
その頭上から悲鳴めいた声が響いた。
「えっ？　キグルミ――オン？」
ウサギが声の主を求めて顔を上げたまま後ろを振り向いた。
「避難しなさい！　とにかくそこから離れて！　危ないから！」
「えっ！　何ですか？　キグルミオンってあれのことですか？　てか、あれ動くんですか！」
ウサギがビルの窓から顔を出している白衣の女性に叫び返す。
その背後でドンという衝撃音とともに、土ぼこりが舞い上がった。
「――ッ！　猫が――猫の巨大着ぐるみが動いた！」
ウサギがもう一度前を向き直り、その目の前に猫の巨大着ぐるみが進み出てくる。
だがその足取りは少々覚束ない。
ヨロヨロとよろめきながら、それこそウサギのすぐ近くをかすめるように足をおろして身を翻す。
ウサギも自分から身を翻し、怪しい足取りの巨大着ぐるみの足からその身をかわした。
「美佳ちゃん！　急いで！　やっぱりキャラスーツとベーススーツの『エンタングルメント』――上手くいってないわ！　ヌイグルミオン――ユカリスキーに『ウィグナーの友人』状態を保つのを最優先にさせて！」
ビルから顔を出していた白衣の女性が慌てたように顔を引っ込めた。その際チラリとウサギの方に目をやった。おそらく最低限このウサギの無事だけを確かめたのだろう。

ごおおおぉぉぉぉ……

もう一度怪獣の咆哮のような地響きがした。
いや、それは本当に怪獣の唸り声だったようだ。
「宇宙怪獣！」

街道の向こうにその姿を見つけ、ウサギがその人類共通の敵の名を叫んだ。
そしてその巨大なは虫類のような宇宙怪獣を一度遠くに見るや、
「――ッ！　キグルミオン！　この子――戦う気なの？」
前のめりに倒れそうになりながら、キグルミオンと呼ばれた巨大な猫の着ぐるみが、立ち向かって行った。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　7

宇宙怪獣は古代の恐竜を思い起こさせる外見をしていた。
強靭な四肢に、凶悪な顎。強大な体躯に、凶暴な咆哮。
それでいて目が赤く妖しく光る――
そのことがこの恐竜をして、地球上の生命体とは一線を画させていた。
そう、それはやはりこれは宇宙怪獣――そのことを知らしめる、異様な赤だ。
そしてその赤い目がとらえたのは、こちらも巨大な着ぐるみだ。
着ぐるみは少々覚束ない足取りで、それでいて巨大な地響きを立てながら向かってくる。
宇宙怪獣に向かって行く巨大着ぐるみ。
その様子を端末で覗き込んだ須藤美佳が後ろの桐山久遠に振り返る。
「『エンタングルメント』率……徐々に下降……短期決戦じゃないと無理……」
「分かってるわ。自衛隊のスクランブルが間に合ったら、それも厄介だしね。早めにケリをつけましょう。キグルミオン！　中の人――ユカリスキー！　ゴー！」
「ユカリスキー……ゴー……」
美佳が面を正面の情報端末に戻し、目にも止まらないような早さで指を走らせる。
その端末の中――暗い中では、ぼうっと機械の光に照らされたぬいぐるみの顔が写し出されていた。コアラのぬいぐるみだ。目が大きなボタンで。口が縫い合わされた×の字。そしての頬にはわざとらしい縫い傷が一つつけられている。
「頼むわよ。人類の最後の希望なんだからね。キグルミオンは……」
普通の事務所としか思えない雑居ビルの一室。二人はその中から、

人類最後の希望と呼んだキグルミオンで、宇宙怪獣に立ち向かおうとする。
久遠と美佳の背後では、まだけたたましく警告灯が点滅していた。そして幾つか設えられたモニターには、発信元『陸上自衛隊』と表示された応答要請が瞬いている。
「博士……自衛隊がさっきからうるさい……」
「返事しちゃダメよ。応答すると、主導権を持って行かれるわ」
「了解……」
美佳は不敵に笑って応えると、情報端末の上で一際力強く指を走らせた。
そのモニターの中では、今正に二つの巨体が激突するところだった。

空気が揺れる。確かなはずの大地が揺さぶられる。
巨大な着ぐるみと宇宙怪獣。その二つが正面から衝突した衝撃は、まるで何かが爆発したかのようだ。
片側四車線ある幹線道路。二つの巨大質量はその交差点で激突した。
人々が捨てて逃げた車が、その衝撃で弾けとんだ。車が音を立てて転がる。
車がビルや街灯にぶつかりやっと止まる。全ての車両が転がり切った後のその光景は、まるで遊び飽きた後の子供部屋のようだ。
だが一瞬遅れて方々で爆発を伴った炎が上がり、これが否応無しに本物の車であることを思い出させる。
巨大な着ぐるみ――キグルミオンは、宇宙怪獣に正面からぶつかって行った。
だが宇宙怪獣がその場を両足の踏ん張りで耐え切ったのに対し、キグルミオンは弾き返されよろめいてしまう。
キグルミオンが体勢を整え直そうとする。

しかし先に、今度はそのキグルミオンに宇宙怪獣が向かって行く。
バランスを失っていたキグルミオンは、宙に浮くように弾き跳ばされた。
地響きを上げてキグルミオンが幹線道路の向こう――己がやってきた方向にもんどりうって転がって行く。
何とか止まった先で、キグルミオンが両手を着いて立ち上がろうした。
だが今度も先手を打ったのは宇宙怪獣の方だ。走り寄ってくるやその凶暴な尻尾を、体ごと一回転して横殴りにキグルミオンに叩き付ける。
キグルミオンがビルに打ち付けられた。背中からビルに半ばめり込んでしまったキグルミオンが、そのことを不幸中の幸いにしてか、何とかバランスを取って直ぐさま立ち上がる。
ぐるりと一回転した宇宙怪獣が、ビルにもたれるように立つキグルミオンに赤い目を向けた。
キグルミオンがやはり少々覚束ない足取りで、その宇宙怪獣に向かって行く。
だが――

「ダメです……キグルミオン……宇宙怪獣に歯が立ちません……」
美佳が情報端末から顔を上げずに、奥歯を噛み締めるように唸った。
そのモニターの中ではビルから立ち上がったキグルミオンが、宇宙怪獣の頭突きに弾き返されていた。
そう。まるで歯が立たず。なす術もないかのように――

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　8

「ダメです……キグルミオン……宇宙怪獣に歯が立ちません……」
美佳がそう報告した時、久遠はその側にはいなかった。
「視認してるわ。動かせるのと、戦えるのとは全く別なのね……私は――私は甘かったの……」
久遠は先程己が顔を出して注意していた窓から、上半身を投げ出すように外の様子を窺っていた。モニター越しがもどかしかったのだろう。
己の体を支える為に窓枠に置かれた手で、ギリリとそのサッシを悔しげに握る。
「……」
久遠が天を見上げた。謎の茨状発光体を険しい視線で見上げる。
「『観測問題』は『シュレーディンガーの猫』では、乗り越えられないということなのね……」
久遠が身を乗り出した道路の向こうでは、巨大着ぐるみが宇宙怪獣に弾き跳ばされ宙に浮いていた。
「やはり『ウィグナーの友人』になるしか……そしてそれになれるのは人間だけ――という訳ね……『人間原理』……あまり強くは考えたくないけど――」
宙に浮かされたキグルミオンが道路に転げ落ちた。そのままもんどりうちながら、久遠達のビルに転がってくる。
「――ッ！」
一際巨大な地響きが起こり、辺り一面が土煙で見えなくなった。
久遠はその衝撃に反射的に目を瞑って耐える。
キグルミオンは久遠達のビルの前まで転がってきていた。
「博士……キグルミオン……エンタングルメントを維持できていません……」
「そうみたいね」

久遠はそのつり目の目を開けて、何も見えなくなった土煙の向こうに視線をやる。
その眼下に己が人類最後の希望と呼んだ、巨大な着ぐるみのシルエットが見えた。
だがそれは今はぴくりとも動かない。
「サイズ補正装置も外れたみたいです……」
「――ッ！　美佳ちゃん！　キャラスーツを強制射出！　一度ヌイグルミオンを出させて、サイズ補正装置をつけ直させて！　再起動よ！」
「はい！」
「それと、いざという時の脱出の準備も」
「博士……」
「勿論諦めたりはしないわ。だけど、一応ね。再起動後は何処までいけるか、様子を見るのも忘れないで」
「はい……」
「どうにもならないようなら、私達が脱出する時間だけ稼いでもらいます。悔しけれど、私はまだ未熟だった。私達はまだ戦えなかった。やり直すわ」
「……」
「大丈夫。でも最後まで諦めたりしないし、あの子達を見捨てたりもしないわ。私達が脱出後――」
久遠がそこまで口にすると、その目の前にキグルミオンが立ち上がる。
もうもうと立ち上がる土煙。その中で立ち上がったキグルミオン。
久遠の立つ窓の外――丁度その正面で、ビル程の巨体が立ち上がっていた。
だが――
「再起動終了……」
「えっ？　動きがよくなってない？　再起動が何か影響を？」
そう、だが何処かその立ち姿は、先程とは打って変わって力強か

った。
先程までの覚束ない足取りが嘘のようだ。
凛々しいまでの姿勢で、キグルミオンがこちらの様子をうかがっている宇宙怪獣に顔を向けた。いや、宇宙怪獣を睨みつけた。
「えっ？」
その様子に久遠が目を見開く。やはり信じられないようだ。
「――ッ！　キグルミオン！　エンタングルメント率、ぐんぐん上がって行きます――」
背後ではこちらもやはり驚きの声で美佳の報告が読み上げられる。
「まるで中の人が代わったみたいに……」
「どうなってるの？　何が起こったの？」
動揺した久遠は目の前のキグルミオンと、背後の美佳に交互に何度も目をやってしまう。
「内部モニターに……人が！　やっぱり、ヌイグルミオンに代わって、誰か入ってます！」
「何ですって！」
その美佳の報告に、久遠が慌てて駆け寄ってくる。
「あなたは誰？　誰が乗っているの！」
久遠が美佳の肩越しに情報端末に食いつくかのように詰問した。
薄暗い着ぐるみの中ような空間。
そこには確かに少女らしき人の姿があった。
「私ですか？」
情報端末からくぐもった声が再生された。
「そうよ！　誰？　てか、危ないわ！　今すぐ降りて――」
久遠に皆まで言わせず、その中の人は――
「中の人は私――仲埜瞳（なかのひとみ）です！」
己を信じて疑わない――そんな瞳を輝かせて堂と己の名を告げた。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　9

「ヒトミちゃんね！　いいから、早く――」
「自衛隊よりの強制入電！　『空対獣ミサイル射出！　貴殿退避されたし！』とのことです！」
　真っ赤に点滅する手元の情報端末。その光に照らされているせいか、それとも鬼気迫る状況がそうさせるのか、美佳が珍しく血色を上げて振りかえる。
「ウオオォォォーッ！」
　二人の悲鳴めいた通信に耳を貸さなかったのか、同じく情報端末からは少女のくぐもってはいるが裂帛の気合いが発せられていた。
　同時に久遠と美佳の耳と体に響く、荒々しくはあるが規則正しい地響き。巨大なキグルミオンが大地を駆ける音だった。
　それは先程までとの覚束ない足取りは全く別の――そう、まるでその巨大な猫の着ぐるみが命を得たかのような力強いものだった。
　キグルミオンはその足で真っ直ぐ宇宙怪獣に向かって行く。
「凄い……キグルミオンを完全に着こなしているの……まさか――」
「ミサイル着弾まで……五秒、四、三、二――」
　久遠が緊迫に息を呑み、やはり緊張に身を固めながら美佳が状況を報告する。
　美佳が秒読みを始めたところで、ビルの窓に鉄のシャッターが降りた。
　事務所内が一瞬で暗くなる。
　そして――
「一！　ミサイル着弾！　衝撃きます！」
　美佳の合図とともに、ビル全体が非常灯の点灯とともに激しく揺れた。鉄のシャッターが降りていなければ、窓という窓のガラスが砕け散っていたかもしれない。
　美佳がイスに座ったまま足を踏ん張り、そのイスに手をかけ久遠

が身を屈めて衝撃に耐える。
「美佳ちゃん！　メインモニタ入れて！」
「はい！」
『メインモニタ』と言われて光が入ったのは、それでも家庭用と思しき壁際のテレビだった。
その一瞬で点いたモニタの中では、もうもうと立ち上がる煙の中、宇宙怪獣が平然と立っていた。
「空対獣ミサイル――やっぱり名前だけね！　キグルミオンは？　ヒトミちゃんは――」
久遠がモニタの向こうに、己の心配が全て詰まっているような巨大着ぐるみの姿を探す。
だがモニタの端から一瞬で現れたキグルミオン――ヒトミは、
「――ッ！　ウソ……」
そんな久遠の思いを驚きに瞬時に変え、宇宙怪獣を殴り飛ばしていた。

巨大な肉体が周囲のビルをなぎ倒し大地を転がって行く。
宇宙怪獣がもんどり打ちながら、最後はビルに背中からぶつかって止まった。
「やったーっ！」
こちらも巨大な猫の着ぐるみ――キグルミオンがその様子に歓喜の声を上げる。
中のヒトミが上げた声が、そのまま外部に増幅されているようだ。
ヒトミは着ぐるみの中にいた。それはこの巨大な着ぐるみをそのまま小さくしたような、実際人間が着るのに丁度いい大きさの猫の着ぐるみだった。
その着ぐるみが何故か暗闇の中に浮かんでいる。
「ヒトミちゃん！　無事ね？　危ないから、早く――」
そんなヒトミの耳元に、桐山久遠の声が再生された。着ぐるみの

頭部にスピーカが内臓されているようだ。
「『危ない』？　危ないのは、地球――ですねよ！」
「ヒトミちゃん？　何を……」
「今、この宇宙怪獣を倒さないと、本当に危ないのは私達の地球ですよね？」
　巨大な着ぐるみが宇宙怪獣をその円らな瞳で見つめる。その瞳はこの緊迫した状況下においても、何処か着ぐるみ特有の優しさを内にたたえていた。
「それは、そうだけど。あなたがソレに乗ってする必要はないわ」
「『乗って』？　何を言ってるんですか？　これは着ぐるみですよね？」
　ヒトミが自分の着ぐるみの両腕を前に出してその掌を見つめる。それに瓜二つの動きで巨大な着ぐるみも両手を前に出してその掌を見つめた。
　そして何故かその視界は、着ぐるみの小さな穴を通しているにかかわらず、暗闇ではなく市街地を背景にその両の掌を写し出す。
「――ッ！」
「着ぐるみに？乗るん？じゃありません！　着ぐるみに？なるん？です！」
　キグルミオンが両手を見つめる向こうで、宇宙怪獣がようやくその足で立ち上がろうとしていた。
「ヒトミちゃん……あなた、まさか……ウィグナーの――」
「私見てました。この巨大な着ぐるみの背中から、小さな着ぐるみが出てくるのを。その中から自分で動くヌイグルミが出てくるのも。それで直感しました」
「そうよ。このキグルミオンはキャラスーツとアクトスーツの二段構成。人間が入る大きさのキャラスーツの動きに合わせて――そう、エンタングルメントさせて巨大な着ぐるみのアクトスーツを動かすのよ」
「エンタン――なんですか？」

宇宙怪獣が唸った。その様子をヒトミは顔を上げて着ぐるみ越しに窺う。
やはり何故かキャラスーツと呼ばれた着ぐるみに小さく開けられた穴から、アクトスーツと呼ばれた巨大着ぐるみの視界が分かる。
「エンタングルメントよ。『もつれ』のことね。そのキグルミオンは、キャラスーツとベーツスーツが『観測問題』を乗り越えつつ、量子的エンタ――」
「難しいことは分かりません。でも、着ぐるみは着ぐるみ――」
宇宙怪獣が駆け出した。大地を震わす地響きを上げて、キグルミオンに向かってくる。
「私の着ぐるみ愛なら――」
「き？　『着ぐるみ愛？』」
スピーカの向こうから、久遠の素っ頓狂な声が再生された。
「どんな着ぐるみにも――」
宇宙怪獣がキグルミオンに激突した。衝撃に大地が鳴り、空気が揺れた。
凶悪とでも言うべき突進だ。
だが――
「なり切ってみせます！」
キグルミオン――仲埜瞳はその己の決意とともに、宇宙怪獣を弾き返した。

一、鎧袖一触！　キグルミオン！　１０

「『ウィグナーの友人』……ヒトミちゃん……あなたは、ソレになれると言うの……」
久遠は半ば放心したように呟いた。
「『シュレーディンガーの猫』に乗り、『ウィグナーの友人』になり切り、『観測問題』をものともせず――」
久遠が美佳の手元の情報端末に手を伸ばした。美佳の肩に久遠の手が無造作にぶつかる。
美佳がそこにいることを忘れているような、端末にしか目に入っていないような手つきだ。
そのモニタの中では、今度も宇宙怪獣が宙を舞っていた。
「博士……」
「天空の和音を、私達に……ヨハネス・ケプラーの夢を私に……」
久遠が端末を操作すると、そこには天空に輝く茨状発光体が写し出される。
「博士……しっかり……」
「――ッ！　ゴメン、美佳ちゃん……そうね……今は――」
久遠の瞳に力が戻る。モニターを切り替えた。キグルミオンから送られていると思しき映像の向こうに、距離を取る結果となった宇宙怪獣が立ち上がろうとしていた。
「あの宇宙怪獣を倒すのが先ね！　ヒトミちゃん！」
「はい！」
「私の名前は桐山久遠。そのキグルミオンの技術責任者よ。須藤美佳ちゃんって娘と、今からあなたをサポートするわ。宇宙怪獣――倒してくれるわね？」
「はい！」
ヒトミの返事に空気を切る飛行音が重なる。続いて閃光とともに上がったのは爆発音。

もうもうたる煙が上がっていた。対宇宙怪獣ミサイルの爆撃跡だ。
戦果を確認せん為にか、その煙をかすめるように攻撃機が急旋回していく。
「いい返事ね。で、見ての通り通常兵器は役に立たないわ。でも――」
久遠が決意と自信に満ちた笑みを浮かべる。
「強い力の粒子――『グルーオン』を物質化している私達のキグルミオンなら話は別よ」
「『強い力の粒子』？」
「そうよ。試しに殴ってみる？　ミサイルなんて目じゃないわよ！」
「博士……結構雑……」
「まずは格闘でいいんですね？　任せて下さい！」
モニターの向こうの視界が揺れる。キグルミオンが煙に向かって突進を始めた。
「そうよ。私達のキグルミオンなら――」
ぐんぐんと宇宙怪獣がモニターの中で大写しになっていく。
「この強い力で、世界を救えるわ！」
久遠自身のその力強い宣言とともに、ヒトミの振り上げた拳が宇宙怪獣の頬にめり込んだ。

空対獣ミサイルを食らった宇宙怪獣が平然と、早くも靄と化し始めた煙の向こうに立っていた。
「うおおぉぉぉーっ！」
その宇宙怪獣にヒトミの――キグルミオンの拳が襲いかかる。
猫の着ぐるみの拳が宇宙怪獣の頬にめり込んでいく。
ミサイルでも無傷だった宇宙怪獣がその一撃で吹き飛んで行った。
地響きを立てて転がって行く。
「いけます！」
「当たり前よ！」

ヒトミの耳元で久遠の上機嫌な声が再生された。
「いい、ヒトミちゃん。手短に話すからよく聞いて。そのキグルミオンは素粒子――そう、例えば『クォーク』間に働く『強い相互作用』を媒介する『グルーオン』という『ゲージ粒子』を物質化しているわ。ゲージ粒子というのは、本来物質間を媒体する力の粒子なの。だから物質として？物？としては取り出せないわ。？物？の粒子は本来ゲージ粒子とは別の『フェルミ粒子』――『フェルミオン』と呼ばれるもので――」
「博士……手短でもなんでもない……」
「内容も、呪文聞いているみたいです！」
美佳が呆れ、ヒトミが悲鳴めいた感想を述べる。
「ええ？　まだ、前振りなのに！　『ダークマター』と、それがもたらしてくれる観測者と、観測対象者の重ね合わせの状態も話さないと。それと――」
「今度にして下さい！」
宇宙怪獣が立ち上がり、怒りの為にか赤い目を更に赤くして突進してくる。
「博士……『ウィグナーの友人』になら、あの娘は自然となってる……ここは我慢……」
「くぅ……そうね――とにかく！　素粒子同士すら結びつける『強い力の粒子』のグルーオンを具現化――そう、言わばフェルミオン化して着ているのが、着グルーミオン――私達のキグルミオンよ！
この強い力が世界を救うのよ！」
「どりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
久遠の話を聞いていたのかいなったのか、ヒトミは雄叫びを上げながら宇宙怪獣と組み合っていた。
「博士！　殴る蹴るだけじゃ、倒せそうにありませんけど？　この後、どうすれば！」
「分かっているわ、ヒトミちゃん！　先ずは格闘で相手の体力を削って！　美佳ちゃん！　自衛隊に伝達！　宇宙怪獣撃退の策あり―

―よ！」
「了解……」
「策――なんですか！　それは？」
ヒトミが着ぐるみの中で汗だくになっていた。特別なものとはいえ着ぐるみの中。ヒトミの体力は目に見えて削られているようだ。
ヒトミが宇宙怪獣を振り払った。息も荒くなり始めていた。体力を回復させたかったのだろう。
「何を言っているの、ヒトミちゃん？　巨大着ぐるみのヒーロー必殺技は――光線に決まっているわ！」
久遠の声が何処か妖しげに再生される。
「ええ！　光線？　出るんですか！」
「ふふん、そうよ。人呼んで――」
もはや久遠はこぼれる笑みを隠さなかったようだ。
「『クォーク・グルーオン・プラズマ』よ！」
久遠がとても楽しげにその名を告げると、キグルミオンの胸元が眩しいまでに輝き始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6145y/

天空和音！　キグルミオン！

2012年1月6日18時47分発行